



Title	対人関係的修辞としてのヘッジ
Author(s)	熊坂, 亮
Citation	独語独文学研究年報, 30, 23-40
Issue Date	2003-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26141
Type	departmental bulletin paper
File Information	30_P23-40.pdf



対人関係的修辭としてのヘッジ

熊坂 亮

1. はじめに

本稿の目的は、「命題内容の解釈を曖昧化するような意味をもつ言葉」が談話においてどのように機能しうるかを説明することである。たとえば次の例

- (1) Ich bin *ein kleines bisschen* von dir enttäuscht. (House/Kasper 1981:167)
(2) Ich bin von dir enttäuscht.

では、(1)は「発話者が相手に対して少しだけ失望している」ことを述べ、(2)は「発話者が相手に対して失望している」ことを述べている。これらを発話の「文字通りの意味」とする。この二つの発話を比べてみると、ある事柄の程度について文字通りの意味の違いが生じている、ということが読み取れる。しかし、いかなるコンテキストにおいても(1)の発話が文字通りに解釈できるというわけではない。すなわち、発話者が「十分に失望している」のであっても *ein kleines bisschen* が用いられている場合がある。それは(1)の *ein kleines bisschen* が、(2)のように *ein kleines bisschen* がないかたちで言った場合に生じる「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげる目的で用いられる場合である。このとき、(1)の *ein kleines bisschen* は「対人関係的修辭¹⁾」として機能している、と呼ぶことにする。

本稿では、このような表現の対人関係的修辭としての機能を語用論的な観点から示すにあたり、「ヘッジ (hedge, hedging /Heckenausdruck)」という捉え方を展開する。

2. ヘッジという概念について

ヘッジとは、研究者によってその定義が様々であるが、元々は以下のような現象を説明するために G. Lakoff (1973) が導入した用語である。

¹⁾ 「対人関係的修辭」とは、Leech (1983) の用語で、Grice (1975) の「協調の原則 (Cooperative Principle)」と Leech 自身の「ポライトネスの原則 (Politeness Principle)」の上位概念とされる。Leech のいう修辭とは、説得などのような伝統的な修辭学の枠組みで語られるものではなく、一般的な意味での、日常会話における効果的な言語使用のことである。Leech はポライトネスを「(他の条件が全て同じであるならば) 礼儀にかなうとは言えないような信念を表わす表現は最小限に抑えること/礼儀にかなうような信念を表わす表現は最大限にすること」(1983:81、池上・河上訳 1987:113) と定式化し、協調の原則の4つの行動指針 (Maxim) と並び立つ「他者に対する負担を最小限にせよ」(1983:132、池上・河上訳 1987:190f.) などの下位区分を設定している。ただし、本稿では「対人関係」という表現をポライトネスに限定して用いる。

- (3) a. A robin is a bird.
 b. A chicken is a bird.
 c. A penguin is a bird.
 d. A bat is a bird.
 e. A cow is a bird.

(G. Lakoff 1973:460)

(3) の陳述のうち a、b、c は真であり、d と e は偽であるが、「鳥」というカテゴリーのうちで最も典型的であるとされる a の robin を筆頭に b の chicken、c の penguin へと移るにつれて鳥として典型的である度合い (G. Lakoff は “birdiness” と表現している) が低くなることから、a は真、b は a より低い度合いで真、c は b より低い度合いで真というように、陳述が真である程度に関してもまた、一つの序列が形成される。また、d の bat と e の cow それぞれの生物学的な性質ゆえに e は d よりも高い度合いで偽となる。

- (4) a. A robin is *sort of* a bird.
 b. A chicken is *sort of* a bird.
 c. A penguin is *sort of* a bird.
 d. A bat is *sort of* a bird.
 e. A cow is *sort of* a bird.

(G. Lakoff 1973:471)

これに対し (4) では、陳述に *sort of* が付加されたことでその命題内容が曖昧化し、chicken や penguin のような典型的でない鳥について述べた b と c はきわめて高い度合いで真となるが、逆に a は偽となってしまう。そして依然として d は真には程遠く、e は偽である。この点は次の (5)、(6) で確認することができる。

- (5) a. A robin is a bird *par excellence*.
 b. A chicken is a bird *par excellence*.
 c. A penguin is a bird *par excellence*.

(G. Lakoff 1973:473)

- (6) a. *In a manner of speaking*, a bat is a bird.
 b. *In a manner of speaking*, a cow is a bird.

(ibid.)

(5) に関しては、上述のように robin は最も典型的な鳥であるので、*par excellence* によって命題内容が強調された a は、やはり真である。ところが (4) の場合と異なり、chicken および penguin は鳥として典型的ではないので b と c の陳述は偽である。(6) では、*in a manner of speaking* によって a は真あるいはきわめて真に近い状態になる。(依然として b は偽である。)

G. Lakoff は「暗黙のうちにその意味が曖昧さに関与するような語、事柄をより曖昧にする、もしくはより曖昧でなくするといった機能を有する語」(1973:471) という定義のもとで、ヘッジを命題内容を強調するもの (intensifier) と曖昧化するもの (deintensifier) の 2 種類に分けているが、以下では、後者の曖昧化するヘッジが談話における対人関係調節にいかんして関与するかを見ていく。

3. ヘッジの対人关系的側面

以上のようにヘッジは従来、ある陳述の真偽の度合いを操作する要素として扱われてきたが、G. Lakoff は遂行文とヘッジの関わりについて若干触れている。たとえば、

(7) *Technically, I said that Harry was a bastard.* (G. Lakoff 1973:490)

では、technically と I said を伴うことで、発話者が Harry was a bastard という内容を真であると実際に信じているか否かは問題ではなくなってしまう。このとき、発話者は単にその内容を言葉として言っているだけでその内容に確信はない、という含意が生じるのである。そのため、Harry was a bastard が偽であったとしても、発話者は何ら責任を問われない。あるいは

(8) a. *I suppose (guess/ think) that Harry is coming.*
b. *Won't you open the door?* (ibid.)

についても同様で、G. Lakoff は (8 a) の文を a hedged assertion、(8 b) の文を a softened request と呼んでいる。これに関して R. Lakoff (1973) は「ポライトネスの規則 (Rules of Politeness)」という観点からヘッジに言及している。ある種のヘッジは、断言をすることによって聞き手の気分を害してしまうというリスクを負いたくない場合に用いられるというのである。

(9) a. *I guess it's time to leave.*
b. *It's time to leave, isn't it?* (R. Lakoff 1973:300)

(9 a) の I guess や (9 b) の isn't it? は、話し手が自分の発話の効力を弱めたいという態度をほのめかす効力をもつ。R. Lakoff (1973) の考えでは、協調の原則が遵守されないとき、それは何らかの意図があつてのことと受けとられるというわけで、そうした意図の一つがポライトネスであるという。R. Lakoff (1973) が挙げているいくつかのポライトネスの規則のうち、ヘッジと関連するのは「選択肢を与えよ」というものである。これは話し手によ

る発話に対してどのような反応や解釈をするかは聞き手自身に決定させよというもので、発話の解釈の可能性に幅を持たせることで「失礼である、感じが悪い」といった印象をやわらげることができる。

- (10) Nixon is an arch-conservative. (R. Lakoff 1973:300)
(11) Nixon is *sort of* conservative. (ibid.)

つまり発話者は、(10)の命題内容を真であると信じている場合であっても、対人関係上の動機で(11)のような *sort of* が付加された表現をとりうるのである。

House/Kasper (1981)もまた、ヘッジという概念にポライトネスという観点を取り入れている。House/Kasper は、発話の効力を強めたり弱めたりする「モダリティの標識」をそれぞれ“Upgraders”、“Downgraders”と名づけ、下位区分を設けている。Downgraders については以下のとおりで、これらがポライトネス効果を生み出すとしている。

1. Politeness marker: please/ bitte
2. Play-down: (a)過去時制: I wonder if .../ Ich wollte dich bitten ...
(b)継続相: I was wondering/
(c)否定: Mightn't it be a good idea .../ Wäre es nicht eine gute Idee ...
(d)疑問: Mightn't it be a good idea?
(e)話法の助動詞: Mightn't ...
3. Consultative Device: Would you mind if .../ Hättest du was dagegen, wenn ...
4. Hedges: kind of, sort of, somehow, and so on, rather/ und so, irgendwie, ziemlich
5. Understater: a little bit, not very much/ ein wenig, nicht sehr viel, ein kleines bisschen
6. Downtoner (Abtönungspartikel): just, simply, perhaps/ mal, eben, wohl, einfach, vielleicht
7. –(“minus”) Committer: I think (guess, believe, suppose) / Ich glaube (meine, denke)
8. Forewarn: you're a nice guy, Jim, but ... / du bist ein netter Kerl, Peter, aber ...
9. Hesitator: erm, er/ äh; どもり、重複
10. Scope-Stater: I'm afraid .../ Ich finde es nicht so gut, daß ...
11. Agent Avoider: 受動態、people, they, one, you を用いた構文

House/Kasper はヘッジを「話し手Xが、命題を明確に断言することを控え、相手の気分を害するようなことを避けるための副詞的語句（文副詞は含まない）」と定義しているように命題を曖昧化する副詞に限定しており、たとえば次のような発話に現れるものとしている。

- (12) Könntest du uns irgendwie n`paar Platten oder so leihen? (House/Kasper 1981:167)

(12) の発話は、植木 (1999:29, 1996:6) にならって次のように説明することができる。まず *Kannst du uns n'paar Platten leihen?*²⁾ に *irgendwie* と *oder so* が付け加えられ、さらに *kannst* が *könntest* と接続法に変わっている。この例では *irgendwie* が *leihen* を、*oder so* が *Platten* を修飾し、それぞれ貸すという行為とレコードという対象を曖昧化している。そのことによって、不特定の表現による聞き手の裁量の余地が生じ、話し手が聞き手に対して何らかの指示を単刀直入に行なうという高圧的な雰囲気緩和されるのである。

このように、「ヘッジ」が何をさすかについては、研究者間で見解が一致しているわけではない。たとえば Luukka/Markkanen (1997) のように非人称構文をヘッジの一種とする立場や、Holmes (1995) のように *prosodic hedge* という名で、文中の上昇イントネーション（いわゆる「半疑問形」）をヘッジに含める立場がある。あるいは - (“minus”) Committer³⁾ のような House/Kasper の Downgraders の多くがヘッジという枠で捉えられうるものである。また、私見では文字コミュニケーションにおける表記のモディファイもまたヘッジ的な機能を果たすものである。たとえばインターネットや電子メールで用いられるフェイスマーク（「絵文字」、「顔文字」ともよばれる）やイメージ伝達の役割を担うフォントもまたコンテキストに応じて対人関係的なはたらきをすることができると思う。つまり、活字による何らかの伝達行為の際、その内容が受け手の心情を害する恐れがある場合、ある種のフェイスマークやフォントを用いることによってそれを緩和することができるのである⁴⁾。これは、対面コミュニケーションにおいて身振りや表情・声のトーンやイントネーションによってもまたヘッジ表現を実現できるというのと同様の観点である。

本稿はヘッジの厳密な定義づけには立ち入らず、談話において「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげるという側面に注目し、上で挙げた以外の典型例をいくつか観察する⁵⁾。

2) Brown/Levinson (1987:134) はこの種の「質問」による「依頼」としての間接発話行為を、相手にある行為を押しつけているのではないということを示し、「依頼」の拒絶ではなく「質問」の否定というかたちの逃げ道を相手に提供しているという点で、「発話行為の効力をやわらげるヘッジ」であるとしている。

3) スイス・ドイツ語では *ich denke* や *ich glaube* にあたる語が、1人称の代名詞と語尾の *-e* が落ちて副詞として用いられるということも注目し値する。*tänk* (Zürich), *dänk* (Bern), *dängg* (Basel) および *glaub* (Zürich), *gloub* (Bern), *glaub* (Basel) という語形をとり、*vermutlich* や *wohl* と同等の意味をもつ。用例は次のとおり。

a. Du wiirsch *tänk* au nöd de ganz Taag umeräne. (Baur 1997:32)
(Du wirst vermutlich auch nicht den ganzen Tag herumrennen.)

b. Er isch *glaub* nöd zfride mit syner Schtelig. (Baur 1997:42)
(Er ist vermutlich mit seiner Stellung nicht zufrieden.)

4) 高本 (1993) は Brown/Levinson (1987) の「フェイス (face)」という概念と「フェイスマークの体面調節機能」という側面を結びつけている。また、フォントとヘッジ効果の関連については、石原/熊坂 (2002:38f.) において、熊坂が若干のコメントをしている。

5) 以下、ヘッジという用語は対人関係的な機能を持つヘッジをさすものとする。

4. 語用論的現象としてのヘッジ

前節では、ヘッジの対人関係的修辭としての側面について見た。ここでは、ヘッジの対人関係的な機能は意味論的・統語論的ではなく、語用論的に効力を発するものと捉えるべき現象であるということを確認する。すなわち、対人関係的修辭のはたらきをするかどうかはコンテキストによって変動するのである。そこでこの点を、i) 話法詞、ii) 程度副詞⁶⁾、iii) 遂行動詞の3つの例を用いて考察する。

i) 話法詞の場合：ある事柄の確信度の低さを意味する表現は、発話のコンテキストや内容そのものによって対人関係的機能を担う。周知のように、話法詞を含む文はそれに対応する動詞や形容詞などによる上位文での書き換えが可能である。

- (13) a. Er ist *vermutlich* mit seiner Stellung nicht zufrieden.
b. Ich vermute (es wird vermutet/ es ist vermutlich so), dass er mit seiner Stellung nicht zufrieden ist.

とすると、

- (14) a. Sie sagt, „Er ist *vermutlich* mit seiner Stellung nicht zufrieden.“
b. Sie vermutet, dass er mit seiner Stellung nicht zufrieden ist.

というように(14)においても同様、この書き換えは成立するはずであるが、(14b)はいかなるコンテキストにおいても(14a)を正確に記述していることになるだろうか？答えは否である。*vermutlich*のような「ある事柄への確信の度合いが低い、あるいは完全ではない様子」を表す副詞は、断言を避けて発話の「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげるストラテジーとして、ある事柄の真偽や適切さについて確信していないかのように偽装するために用いることができるからである。そこで、このことを理解するために、話法詞がどのように対人関係的な修辭として機能するかを詳しく見てみる。

- (15) 01 #Es gibt bestimmt bessere Studienorte als Dresden, auf alle Fälle mal.
02 Aber ich muss sagen, mich hat's auch wieder von einer anderen Stadt hierher zurückgezogen.
03 Weil Dresden irgendwo, abgesehen jetzt, dass es vielleicht nicht der beste Platz zum Studieren ist, aber doch ein, ein Flair hat, was ich in einer anderen Stadt noch nicht wieder gefunden hab'.#{LÄCHELT}⁷⁾

⁶⁾ 本稿の用いる「話法詞」、「程度副詞」という名称は井口(2000)にならうものである。

まず 01 の発話が *bestimmt* を含んでいることから、発話者は「勉強にはドレスデンよりもいい場所がある」と確信している、ということが読み取れる。ところが、03 の発話の *vielleicht* によって、文字通りには 03 では発話者が「勉強にはドレスデンよりもいい場所がある」ということについてあまり確信しきれていない、ということになる。つまりこの談話は、文字通りの意味だけで解釈すると、矛盾した内容となる。したがって、*bestimmt* と *vielleicht* のいずれか一方が文字通りの意味をほとんど失っているということになるが、このとき「文字通りに伝えたい情報」ではないと捉えられるのは、*vielleicht* である。というのは、03 の発話の *vielleicht* は「勉強にはドレスデンよりもいい場所がある」という内容を曖昧化することでその「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげるために用いられているからである。いかなれば、この *vielleicht* には実際に話し手の「事柄に対する不確かさ」という心的態度が反映されているというよりも、話し手がそうした心的態度であるかのように表現したというわけである。このような意味で、(14 a) の *vermutlich* が対人関係上の理由から用いられているのであれば、(14 b) への書き換えは不自然なものとなる⁸⁾。

ただし話法詞の中でも *vielleicht* は、譲歩文の標識としても用いられる。

(16) Sie hat *vielleicht* einen Fehler gemacht. *Aber* man sollte auch ihre Verdienste sehen.

(Engel 1988:91)

Engel (1988:91)の説明によれば、*vielleicht* は後続の *aber* と呼応して譲歩を表す文にも用いられるが、このとき *vielleicht* が伝えるのは発話内容の真偽に対する不確かさではなく、判断の留保である。Engel (1988:91) がこの場合の *vielleicht* の対人関係的な機能という側面に言及しているわけではないが、このような譲歩文においてもその欠如が「失礼さ、感じの悪さ」をもたらすような発話においては、*vielleicht* もまた対人関係的なヘッジとみなしてさしつかえないと考える。

⁷⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 10: Technische Universität Dresden”。ドレスデンで学ぶ学生が、ドレスデンは勉強にとって理想的な場所か、というインタビューに答えている。また、例文で用いられている記号の意味は以下の通りで、(18)、(24)～(27)の例にも適用されるものとする。

，	：区切りまたはわずかな間	{ }	：非言語行動、該当範囲は# #内
<u>下線</u>	：注目する表現	.	：下降イントネーション
...	：中程度の間	点線	：その他のヘッジ

⁸⁾ たとえば次のようなコンテキストを与えてみよう。：発話者は常日頃、同僚から愚痴を聞かされていて、明らかに彼が職場に不満を持っていることを知っている。そんな中、社長が発話者に、その同僚の仕事ぶりについて尋ねた。発話者は、彼が職場に不満を持っているということを、確信を持って答えることができる状態にある。が、確信をもって会社批判につながる回答を提示すること、そして同僚の心情を自分のことであるかのように表現することを、「失礼である、感じが悪い」と判断し、断言を避ける言い方を選んだ。

ii) 程度副詞の場合：ある事柄の度合いの低さを意味する表現は、発話のコンテキストや内容そのものによって対人関係的機能を担う。次の例は、話し手が聞き手に文字通り小額の金銭を要求するものである⁹⁾。

(17) Kannst du mir *etwas* Geld leihen?

これに対し次の例に現れる程度詞 *ziemlich* および *ein bisschen* は、命題の解釈の可能性を曖昧にする。

(18) 01 Ich finde, dass dieser Protest äh ziemlich zu spät gekommen ist, und von daher hat er sich von vorneherein ein bisschen lächerlich gemacht.

02 Und hm ich kann halt eben auch nicht verstehen, äh ... ich halte es, ich halte es mehr für, hm für einen Aufschrei der Gewohnheitstiere, die eben auch als Schriftsteller schon in die Jahre gekommen sind, und halte es mehr für einen konservativen Populismus, als dass da jetzt sehr viel Sinn und Verstand hinter ist, hinter diesem Protest.¹⁰⁾

この談話は、*ziemlich* と *zu* に注目して、次のように分析することができる。01 の発話に *ziemlich* と *zu* が同時に現れているが、このことが意味するのは、文字通りの意味だけであると矛盾が生じてしまうということである。つまり、文字通りの意味を発動しているのは *ziemlich* と *zu* のいずれか一方である。そこで02の発話より、ある対象、具体的には「ベテランの作家たち」を痛烈に批判する発話内容である、ということが読み取れる。したがって、01の発話に現れた *ziemlich* と *zu* のうち、文字通りの意味を持つのは *zu* であると理解することができる。このとき、「程度が高くない様子」を意味する *ziemlich* は「文字通りに伝えたい情報」ではない。つまり、01の発話に *ziemlich* が存在するのは、「ベテラン作家たちの抗議行動は遅すぎた」という批判の持つ「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげるためということができるのである。

まとめると、*ziemlich* のような「ある状態や性質の程度が低い、あるいは完全ではない様子」を表す副詞は、内容を曖昧化することで「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげるストラテジーとして、ある状態や性質の程度を低く見積もっているかのように偽装するために用いることができる、というわけである。だから、次の(19a)と(19b)では、(18)と同様のコンテキストにおいては、発話者の言いたいことは事実上同じである。

⁹⁾ もちろん、金を貸してもらおうという行為自体が相手の負担になることであるので、金額の多少にかかわらず *etwas* のような程度副詞が付加されていると取れることもある。この観点からすれば、(17)の *etwas* も対人関係的な役割を果たすものである。

¹⁰⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 3: Die Rechtschreibreform”。正書法改正に対する抗議行動をなかなか起こそうとしなかったベテランの作家たちが、時すでに遅しという時にやっと重い腰を上げた。このことについて、一人の若手作家が意見を述べている。

- (19) a. Ich finde, dass dieser Protest *ziemlich* zu spät gekommen ist.
 b. Dieser Protest ist zu spät gekommen.

つまり、*ziemlich* が直後の *zu* を修飾したところで、その辞書的な意味は話し手の「伝えたい情報」としては不要である。これは、(18) の内容が強烈な批判であることから推測できる。さらに *ein bisschen* も同様に、*lächerlich* を修飾して度合いを弱めているが、その内容から、話し手にとっては「伝えたい情報」ではないと判断できる。

iii) 遂行動詞の場合：ある種の一人称単数・現在時制・直説法・能動態の動詞は、発話のコンテキストや内容そのものによって対人関係的機能を担う。Austin (1962) の発話行為理論では、行為遂行動詞とは一人称単数・現在時制・直説法・能動態の平叙文において、発話を単なる陳述ではなくその動詞の意味が示す行為そのものとして成立させる動詞のことである。行為遂行動詞を用いて明示的に発話行為を遂行する文を行為遂行文 (performative) という。

- (20) Ich verspreche dir, morgen das Buch mitzubringen.
 (21) Ich befehle dir, dass du das Zimmer verlässt.

(20) では「明日その本を持ってくると約束するよ。」という発話によって話し手は「約束」という行為を遂行しているということになり、(21) では「君にこの部屋から立ち去ることを命じる。」という発話によって話し手は「命令」という行為を遂行しているということになるのである。Thomas (1995) は行為遂行文について独自の分類を試みており、「メタ言語的行為遂行文 (metalinguistic performatives)」というタイプの行為遂行文をそのカテゴリーの一つとしている。たとえば次の例

- (22) a. John is a liar.
 b. *I say* that John is a liar. (Thomas 1995:34)
- (23) a. I am innocent.
 b. *I plead* not guilty. (ibid.)

では、それぞれ a の文はその陳述内容が現実に真である場合、すなわち John がうそつきであると証明された場合、また (23) の話し手が起訴されている罪を犯していない場合には真となる。それに対し b の文は常に真である。I say は後にいかなる命題が続こうと、真でないことは論理上ありえないからである。また、(23) の話し手が明らかに有罪であっても、I plead と申し立てることはできる。もちろん、あとで有罪であることが判明しても、I plead という陳述自体は真であるので、not guilty という発言があとに続いていても論理的には偽

証ということにはならない。このようにメタ言語的行為遂行文は、すべての行為遂行文と同様に自己指示的 (self-referential) であり、自己立証的 (self-verifying) であり、論駁不可能 (non-falsifiable) である。つまり、話し手の行為自体を動詞が表しており、それ自身が真理条件を含んでおり、決して偽ではありえないのである。(これについては (7) の例も参照されたい。) 以下の例に出てくる ich sage は、このような遂行文をつくる機能を果たすと考えてよい。

(24) Gewusst hat man's ja vorher auch schon, und sage ich mal, in den großen Supermärkten das Fleisch, das habe ich eh nicht gekauft.¹¹⁾

(24) のように後にどのような内容が導かれていようと、ich sage 自体は真にしかなりえない。それゆえ発話者は、これらの導く内容が「失礼さ、感じの悪さ」を生じさせる内容であろうとなかろうと、表面上は責任を負う必要はないわけである。だから、(24) の大型スーパーは信用できないという批判(「大きなスーパーでは肉を買っていない」という発話からの推意)が発話者の真意であるのかどうかということは曖昧になる。

このように ich sage は論理構造上ヘッジとして機能しうるが、実際には (24) のように mal などと共に用いられたり、以下に示すようなバリエーションで現れたりすることが多い。以下の例の ich würde sagen の類は行為遂行文には属さないが、同様の機能を担う。

(25) Ja, man kann damit äh sein Bewusstsein erweitern, man kann es aber auch auf falsche Art schulen. Also ich würd sagen, jede Sache, die neu kommt, hat zwei Seiten.¹²⁾

(25) の ich würd sagen は、ZKM の斬新さゆえの弊害についての意見をやわらげている。ich würde sagen は、ich sage が接続法になったもので、DUDEN (2001) には

SAGEN (ugs.) annehmen, glauben; ich würde s. (ich glaube, meine)

という記述がある。ここからも ich würde sagen がヘッジになりうる事が確認できる。(26) はわかりやすい例で、

(26) Von meiner Seite her als Evolutionsgenetiker gesehen, würde ich ... sagen, dass wir heute

¹¹⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 38: Ernährung: Krise und Umdenken?”. B S E 問題との関連で、大型スーパーで売られている肉が安全の安全性について買い物客がコメントしている。

¹²⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 15: ZKM |Zentrum für Kunst und Medientechnologie”. 新しいメディアを取り入れた芸術作品の美術館 ZKM (Zentrum für Kunst und Medientechnologie) を訪れた人が感想を述べている。

schon sagen können, dass das überhaupt keinen Sinn macht, so etwas überhaupt nur zu versuchen ...¹³⁾

というように ich würde sagen にさらに wir können sagen をかぶせることで強い批判をやわらげている。もちろんこの種の表現も他のヘッジと同様、コンテキストや発話内容によってヘッジとして捉えられるか否かは変動する。これを次の例の ich muss sagen で説明する。

(27) Ich find es nur nicht richtig, dass der Kommerz so groß ist dann. Dass da so viel verdient wird, muss ich ehrlich sagen.¹⁴⁾

(27) はサッカーチームの経営のやり方を批判する発話である。この ich muss sagen は「…と言わざるを得ない」と直訳できるものであるが、批判的な内容であるので「言いたくないのだが、どうしても言わなくてはならない」というニュアンスを醸し出して「失礼さ、感じの悪さ」を緩和している。ところが ich muss sagen がいかなるコンテキストにおいてもそのような役割を果たしているというわけではない。(15) を例にとると、発話者は 01 では「勉強にはドレスデンよりもいい場所がある」という失礼にあたりそうなことを言っているが、次の 02 以降ではドレスデンへの愛着を語っている。つまり 02 以降の談話は批判的な内容を含まない。むしろ、02 の発話は ich muss sagen によって発話者の気持ちを強調していると理解することができる。たとえば、「たとえ他の街に行っても、戻って来たいとしか言いようがないくらいドレスデンは素晴らしい！」というようにである。つまり、「失礼さ、感じの悪さ」を緩和しているものではないので、これはヘッジとは捉えない。

以上、語法詞、程度副詞、遂行動詞の例で、ヘッジが文脈との関連においてどのように機能するかを見た。とくに (16) と (18) の例は文字通りにとると矛盾が生じるようなわかりやすい例で、「日常会話における発話というのは、たいていはこの原則 (= 協調の原則) に違反しているものであり、文法規則に反する文が“non-sentence”とみなされるのとは違い、協調の原則の違反が“non-conversation”と受けとられたりはしない」という R. Lakoff (1973: 297) の言葉によく言い表されているものであろう。そこでまとめとして、以下において House/Kasper (1981:157) の「他者防衛」、「自己防衛」という言葉でヘッジ使用の動機づけについて示す。ヘッジを用いることの動機づけは実際には二つある。一つ目は、聞き手（ないしは発話の中で言及される対象）への配慮、すなわち「他者防衛」の側面である。これまで見たように、ヘッジは発話の「失礼さ、感じの悪さ」をやわらげる手段である。これは、Brown/Levinson (1987) の枠組みではコミュニケーションの相手の「自由な行動を邪魔さ

¹³⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 29: Sloterdijk und Gentechnik”。哲学者 Peter Sloterdijk の思想について、自然科学の見地から専門家が疑いをさしはさんでいる。

¹⁴⁾ 出典：Goethe-Institut “Videomagazin KuBus 49: Wirtschaftsfaktor Fußball”。サッカーの商業主義的な傾向が激化してきた状況に対するファンの意見。

れたくない、自分が何かに注意を向けているのを妨害されたくない、という欲求」(p.129)としての「ネガティブ・フェイス (negative face)」に配慮¹⁵⁾する言語行動、すなわちネガティブ・ポライトネスのストラテジーである。Brown/Levinson は通常のコミュニケーションの意図というのは潜在的にフェイスを脅かす行為にあたるものであると考え、ヘッジはそうしたフェイスの侵害をやわらげるための最も重要で基本的な手段であるとしている。

そして二つ目は、自己の発話に対する責任回避、すなわち「自己防衛」の側面である。とりわけ遂行文の例で明るみに出たと思われるが、ヘッジは「自分の言明を相手に否定されること」ないしは「相手との相違が生じること」を避けるための手段でもある。つまりヘッジを用いることで、自己のフェイス¹⁶⁾が維持されるわけである。Markkanen/Schröder (1997:8)によれば、ヘッジの使用は自分の発言が間違いだということが判明するという恐れなどに動機づけられており、発話の真偽に対する責任が曖昧になったことで後で釈明をすることが可能になるわけである。Hübler (1983:155)は、ヘッジの機能は相手に言明を否定される可能性 (negatability) を低下させることであり、ヘッジを用いることで言明が相手にとってより「批准」しやすいものになるとしている。たとえば(15)の例では文中に *vielleicht* があることで、「勉強にはドレスデンよりもいい場所がある」という言明が的外れであると指摘されたとき、その文中の *vielleicht* の文字通りの意味を利用して「ドレスデンよりもいい場所がある、というのは確信をもって断言したのではなかった」と釈明することができる。また(18)では、文中に *ziemlich* や *ein bisschen* があることで、「ベテラン作家たちの抗議行動は遅すぎた、ばかげている」という批判が的外れであると指摘されたとき、文中の *ziemlich* や *ein bisschen* の文字通りの意味を利用して「その抗議行動はある程度遅かった、ほんの少しだけばかげている、と認めていただけだ」という釈明ができる。このようにヘッジは自分の責任を回避¹⁷⁾するためのストラテジーになるという意味でも、ヘッジは対人関係的な側面をもつ。

¹⁵⁾ 本稿との関連でいえば、命令や依頼、提案のような「Hによる未来の行為Aを示し、Hに行為Aを行なうように圧力をかける行為」が相手のネガティブ・フェイスを侵害する行為にあたる。

¹⁶⁾ ここで維持されるフェイスとは、「自分の欲求が少なくとも他者にとって望ましいものであってほしいという欲求」(Brown/Levinson 1987: 62)としての「ポジティブ・フェイス (positive face)」である。「否定」のような、相手との相違を示すことは相手のポジティブ・フェイスを侵害する行為にあたる。

¹⁷⁾ 日本語の並列助詞「とか」の分析にあたり、辻(1996)は、「必ずしも Habermas を忠実に引き写したのではなく、筆者なりの変奏を加えたものであることを断っておく」(p.57 n5)としたうえで Habermas (1976, 1981) の「発語内的拘束効果 (Bindungseffekt)」という考え方を援用している。この観点からいえば、ヘッジは、妥当主張 (Geltungsanspruch) を伴う発話行為が設定する拘束力を緩衝するための手段でもある。

5. 態度表明の標識としてのヘッジ

ヘッジは上記のような対人関係的「態度」を伝える手段である。言い換えれば、vielleicht, ziemlichなどの言葉を用いること自体が発話者にとって重要なのである。こうした態度表明の標識という観点から、Brown/Levinson (1987) はヘッジを明確な文字通りの意味というよりもむしろ自分の発話に対する態度を表明するものとしている。

(28) You really should *sort of* try harder.

(Brown/Levinson 1987:117)

(28)の発話には、相手に対する批判をやわらげる手段としての *sort of* というヘッジがみられる。この *sort of* は、不確かさやためらいを表現して相手との衝突を避ける機能を果たす。really と言っておきながらその後に *sort of* が現れているが、Brown/Levinson の説明によれば、この種の副詞的語句がその文字通りの意味をほとんど失っているから、共起している両者が矛盾しているものと受け取られないというわけである。このことはこれまで挙げたいくつかの例でも確認される。また Itani (1996:30) は、ヘッジは語用論的現象であり、発話者が「自分は発話が伝達する命題の真偽については、完全には確信あるいは責任を持っていない」ということを伝達する手段であるとしている。つまり、ヘッジは「言語的な内容とは別の、意図明示の刺激 (ostensive stimulus) という特徴によって実現される」(Itani 1996:52) ののである。意図明示行為 (ostensive behavior) あるいは意図明示 (ostention) とは、Sperber/Wilson (1995:49, 内田他訳 1999:58f.) によれば、送り手がある特定の想定 (assumption) を受け手に顕在化しようと意図している、ということ顕在化する行為である。たとえば「交感伝達 (phatic communication)」「(交話的コミュニケーション)ともいう) がその一つで、松井 (2001) はそこにポライトネスと「関連性理論」(Sperber/Wilson 1995) の接点を見出している。「交感伝達」ないし「言語交際 (phatic communion)」(Malinowski 1923:315, 石橋訳 1967:406) とは、Malinowski の用語で、「元気ですか」とか「いい天気ですね」のような「ある社会の挨拶、または近づきのきまり文句」(Malinowski 1923:314, 石橋訳 1967:405) を発することによってコミュニケーションの参加者の間に友好関係をつくる伝達行為である。交話的コミュニケーションで用いられる言葉は、その文字通りの意味を伝えるものではなく、社会的機能を果たすものだとしている。また、伝達を開始したり、延長したり、打ち切ったり、回路が働いているかを確認したりする場合にも現れる (Jakobson 1960:355, 田村他訳 1973:191)。このような情報の交換を目的としないコミュニケーションの認知的な意義を考えるうえで重要なのが意図明示という概念なのである。関連性理論の考え方では、発話行為は伝達する情報を処理する労力を聞き手に要求することである一方、聞き手の発話理解という行為は伝達される情報処理にかかる労力を提供するという理解に基づくものである。そしてこの理解には、情報処理の労力の提供にはそれなりの見返りがあるだろうという聞き手の「見返りの期待」(Sperber/Wilson 1986:49)が伴うわけである。たとえば、

(29) A：寒さが本格的になりましたね。

B：そうですね。

(松井 2001:57)

のような会話においても、話し手の伝達意図の提示に対して聞き手は関連性の期待を持つ。「寒さが本格的になった」という情報が関連性をほとんど持たないために、聞き手はそれ以外に関連性を求め、その結果、話し手が自分に対してコミュニケーションの意図そのものに関連性を見出すことになる。つまり、1) 最近寒さが本格的になった、2) 話し手は最近寒さが本格的になったと言った、3) 話し手は自分と言葉を交わしたいと思っている、4) 話し手は自分と良い人間関係を築きたいと思っている、のうち発話命題である1)からは文脈効果、つまり新情報が聞き手の既知情報(文脈)と組み合わせざったときにひき起こされる認知環境の変化が生じず、聞き手は2)の発話行為の情報に効果を見出す、ということになる。2)からはさらに3)や4)のような弱い推意が導き出される可能性があり、これらがポライトネスに貢献するのである(松井 2001:57)。ヘッジもまた同様の手続きを経て、意味伝達の上ではヘッジ表現がなくても支障がないという状態に達すると考えてよいだろう。たとえば「この ein bisschen は、lächerlich の程度を文字通りに低く見積もる意味ではなく、そうすることでポライトに振舞おうという意図の表れなのだろう」という推意が生じるというようにである。

以上、ヘッジとは語用論的に捉えられる現象であり、ある表現がヘッジとなるかどうかはコンテキストおよび発話の内容で決定されるものとした。そして、本質的に「釈明可能」の意味を持つ言語形式であるという点、主として対人関係の動機から発生しており、文字通りの意味そのものはほとんど残していないという点をヘッジの特徴として設定した。

6. まとめと展望

人はなぜ、意識の中で思ったことをそのままストレートに言葉に出さないのか。この問いは、コミュニケーションというものを捉える上で最も重要な問いの一つであると同時に、誰しもがその答えを経験的に知っている問いでもある。この関連において本稿は、ヘッジの対人関係的な側面を確認した。最後に、いくつかの補足を記す。

ヘッジは、命題内容を曖昧化することで、発話の「失礼さ、感じの悪さ」を緩和する機能(=他者防衛)と、内容に対する自分の責任を回避する機能(=自己防衛)を有するが、必ずしもいずれか一方だけのはたらきをするわけではない。あるときは大幅な自己防衛と若干の他者防衛、またあるときはある程度の自己防衛とそれよりも多めの他者防衛、というようにさまざまな流動性を見せながらそれぞれのフェイスが守られるのである。

また、ヘッジは文字通りの意味をほぼ形骸化して対人関係上の態度を伝える手段になるわけであるが、文字通りの意味と対人関係的機能の両方を有することもある。これは、ヘッジがその文字通りの意味を経由して命題内容の解釈の可能性を曖昧にするという性質ゆ

えに、文字通りの意味が完全に保持されているとはいえないが、完全に失われているともいえないという状態を示す。(この点において交話的コミュニケーションとの違いがみられる。)これは、ある表現が対人関係機能を発揮していても、さほど対人関係的に重要ではなく、むしろ文字通りの意味のほうが強く出ているようなケースもあるということを意味している。また、たとえば話し手はどちらかというヘッジとして用いたが、聞き手にとってはどちらかという文字通りの意味に受け取れるというように、解釈にズレが生じるケースもありうるということも表している。

さらに、対人関係的な機能を有するヘッジは、意図的に用いられるものと、使用を発話状況に強制される(「規範的な」と呼ぶことにする)ものがあるという観点からも捉えることもできるであろう。(14)の例(また、注8)にあるように、たとえば他者の心情を自分のことであるかのように表現することを「失礼である、感じが悪い」と判断するというのは、他者の心情についての情報というものが話し手自身の「情報のなわ張り」(神尾 1990, 2002)に属していないからである。話し手個人の「知っている」情報ではあっても「なわ張り内にある」情報ではない。すなわち、情報との心理的距離ゆえに、ヘッジを用いた間接的な、断定的でない言い回しの必須度が高まるわけである¹⁸⁾。この種のヘッジは、あって然るべきと認識され、欠如してはじめて「失礼である、感じが悪い」と捉えられるような、それ自体でポライトであるわけではないものである¹⁹⁾。したがって、その欠如が

¹⁸⁾ 神尾(1990:33)によれば、ある情報が発話者の「情報のなわ張り」に属することができるのは、その情報が以下の条件のうちのいずれかを満たしている場合である。

- a. X自身が直接体験によって得た情報
- b. X自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表わす情報
- c. X自身の確定している行動予定および計画などについての情報
- d. X自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表わす情報
- e. X自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報
- f. X自身の職業的あるいは専門領域における基本的情報
- g. X自身が深い地理的関係を持つ場所についての情報
- h. その他、X自身に何らかの深い関わりを持つ情報

¹⁹⁾ 欠如してはじめて「失礼である、感じが悪い」と捉えられる「無標ポライトネス」という考え方については宇佐美(2001)を参照。ただし、「なわ張り」との関連で神尾(1990)が指摘している「丁寧さ」は、自己のなわ張り内にあることを、あたかも自分のなわ張り外にあるかのように述べるという、意図的なポライトネス・ストラテジーを指す。たとえば次のaをbに言い換えるといったようにである。

- a. 君ははしゃぎ過ぎだよ。
- b. 君、はしゃぎ過ぎなんじゃないの。(神尾 1990:232f.)

また、神尾(1990, 2002)自身は「なわ張り」の枠組みでヘッジという用語を用いているわけではないということを断っておく。

意味論上ではなく、対人関係上の支障をきたすという点では、戦略的に用いられるヘッジと共通している。

このように、ヘッジ使用には対立する要素を含むいくつかの次元があり、実際にはそれぞれが複雑に関連し合っているものと思われる。以上、本稿はそのような意味でヘッジの諸相を簡略化したものであるが、ヘッジには対人関係的な側面があるということを明らかにした。

※本稿は、北海道ドイツ文学会・第57回研究発表会（2003年7月19日、苫小牧駒澤大学）における研究発表「対人関係の修辞としての副詞－『ヘッジ』という捉え方」での報告に加筆修正を施したものである。

参考文献

- Austin, John L. (1962): *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. [坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 1978]
- Baur, Arthur (1997): *Schwyzertüüsch »Grüezi mitenand«: Praktische Sprachlehre des Schweizerdeutschen für Kurse und den Selbstunterricht*. 11. Auflage. Winterthur: Gemsberg.
- Brown, Penelope/ Levinson, Stephen C (1987): *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duden (2001): *Deutsches Universalwörterbuch*. Anette Klosa et al. (eds.), Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Grice, Paul (1975): *Logic and Conversation*. In: Cole, Peter/Morgan, Jerry L. (eds.), *Speech acts*. (Syntax and Semantics 3) Orlando: Academic Press, 41-58. [清塚邦彦訳『論理と会話』（第2章）勁草書房 1998、31-60.]
- Habermas, Jürgen (1976): *Was heißt Universalpragmatik?* In: Apel, Karl-Otto (ed.), *Sprachpragmatik und Philosophie*. Frankfurt a.M: Suhrkamp, 174-272.
- Habermas, Jürgen (1981): *Theorie des kommunikativen Handelns*. 2 Bde. Frankfurt a.M: Suhrkamp. [岩倉正博他訳『コミュニケーション的行為の理論』未来社 1986、全3巻]
- Holmes, Janet (1995): *Women, Men and Politeness*. London: Longman.
- House, Juliane/ Kasper, Gabriele (1981): *Politeness Markers in English and German*. In: Coulmas, Florian (ed.), *Conversational Routine. Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. The Hauge: Mouton de Gruyter, 157-185.
- Hübler, Axel (1983): *Understatements and hedges in English*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins publishing company.

- 井口靖 (2000): 「副詞」、浜崎長寿他編『ドイツ語文法シリーズ』5、大学書林
- 石原次郎・熊坂亮 (2002): 「フォントの違いによるイメージの伝達効果」、『独語独文学研究年報』北海道大学ドイツ語学・文学研究会、25-40.
- Itani, Reiko (1996): *Semantics and pragmatics of hedges in English and Japanese*. Tokyo: Hituji Syobo.
- Jakobson, Roman (1960): *Linguistics and Poetics*. In: Sebeok, Thomas A. (ed.), *Style in Language*. Cambridge: Mass, 350-377. [「言語学と詩学」、田村すす子他訳『一般言語学』みすす書房 1973、183-221.]
- 神尾昭雄 (1990): 「情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—」、大修館書店
- 神尾昭雄 (2002): 「続・情報のなわ張り理論」、大修館書店
- Lakoff, George (1973): *Hedges: a Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts*. In: *Journal of Philosophical Logic* 2, 458-508.
- Lakoff, Robin (1973): *The Logic of Politeness; or minding your p's and q's*. In: *Papers from the seventh regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 292-305.
- Leech, Geoffrey N. (1983): *Principles of pragmatics*. London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店 1987]
- Luukka, Minna-Riitta/ Markkanen, Raija (1997): *Impersonalization as a Form Hedging*. In: Markkanen, Raija /Schröder, Hartmut (eds.), *Hedging and Discourse; Approaches to the Analysis of a Pragmatic Phenomenon in Academic Texts*. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 168-187.
- Malinowski, Bronislaw (1923): *The Problem of Meaning in the Primitive Languages*. In: Ogden, Charles K./ Richards, Ivor A. (eds.), *The Meaning of Meaning; A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*. London: Routledge & Kegan Paul, 296-336. [「原始言語における意味の問題」、石橋幸太郎訳『意味の意味』新泉社 1967、385-430.]
- Markkanen, Raija/ Schröder, Hartmut (1997): *Hedging: A Challenge for Pragmatics and Discourse Analysis*. In: Markkanen, Raija /Schröder, Hartmut (eds.), *Hedging and Discourse; Approaches to the Analysis of a Pragmatic Phenomenon in Academic Texts*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 3-11.
- 松井智子 (2001): 「関連性理論から見たポライトネス一意図伝達性の問題について」『月刊言語』11月号、大修館書店、52-59.
- Sperber, Dan/ Wilson, Deidre (1995): *Relevance: communication and cognition. (2nd Edition)* Oxford: Blackwell. [内田聖二他訳『関連性理論—伝達と認知—』第2版、研究社 1999]
- 高本條治 (1993): 「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」、『日本語学』12月号、明治書院、63-74.

- Thomas, Jenny (1995): *Meaning in Interaction: an Introduction to Pragmatics*. London: Longman.
[浅羽亮一監修、田中典子他訳『語用論入門』研究社 1998]
- 辻大介 (1996): 「若者におけるコミュニケーション様式変化: 若者語のポストモダニティ」、
『東京大学社会情報研究所紀要』 51号、42-61.
- 植木迪子 (1996): 「対話モデルとしての質問返答システムの研究」平成7年度科学研究費
補助金(一般研究C)研究成果報告書(研究課題番号 06610457)
- 植木迪子 (1999): 「語用論における連続性—談話におけるヘッジ表現を一例として」平成
8年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(研
究番号 08451101)、27-43.
- 宇佐美まゆみ (2001): 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」、『第七回国
立国語研究所国際シンポジウム報告書—談話のポライトネス』国立国語研究所
編、9-58.

(北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程)